

保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか

—「保育者」イメージを中心に—

鳥丸 佐知子

本論は学生が懐く「保育者」イメージが、保育士養成のための関連授業を受けることでどう変化するのかを調査したものである。入学直後、およびすべての実習が終了する1年半後の2回に渡り、まず「保育者」に関するマインドマップ作成、その後「保育者」から始まるSCTを実施した。テキストマイニングによる分析を実施した結果、「保育者」と「子ども」の距離感、「保育者」と自分自身の位置関係など、いくつかの点で変化が明らかになった。

キーワード：保育者、保護者、子ども、テキストマイニング、KHCoder

1. はじめに

本学の幼児教育学科は、保育士養成校と呼ばれる短期大学のひとつである。そのため本学科に入学する学生は、将来自分が「保育者」になることを当たり前の道筋として思い描いているものも少なくない。また入学さえできれば、自然の流れで、だれもが保育士の資格を取得できると思込んでいる学生も多い。しかし、入学後に受講するさまざまな講義や演習の内容、さらには数種類の実習は、時に彼女らが予想していた「保育者」イメージを根本から覆すような、思いがけない経験になることもあるようである。

そもそも彼女らは、「保育者」という職業に、どのようなイメージを持って入学してくるのだろうか。また関連授業を受講した後、本来持っていた「保育者」イメージのどの部分が変わり、どの部分が持続されるのだろうか。

換言すれば、保育士養成のための学びは、彼女らの「保育者」イメージのどこに最も大きな影響を与えるのであろう。

また、同じ講義や演習、さらに実習を経験す

ることで、「保育者」になる夢がさらに大きくなる学生がいる一方で、こんなはずではなかったと、早々に将来の方向転換を考える学生が存在するのは何故なのだろう。

さらには、近年就職できたにもかかわらず、短期間で離職するものが増えているといわれるが、その原因はどこにあるのだろうか。この現象はなぜ増加してきたのであろうか。学生自身が描いている「保育者」イメージや具体的な仕事内容と、実際に現場に出て気付く、決定的な食い違いはどこにあるのだろうか。

将来のミスマッチを可能な限り少なくするために、養成校の教員はどのようなことに留意する必要があるのだろうか。彼女らは何に困り、どこで躓いてしまうのか。この問題について原因を探ろうとする試みは、彼女らを支えるための大きな力となるはずである。

鳥丸¹⁾(2010)でも「保育者イメージ」に関する同様の調査を実施したが、今回は何が「変化」するのかを調べるため、同じ学生を対象に「入学直後」と、すべての実習が終了する「1年半後」の2度に渡って調査を実施した。なお本調

査では、保育者イメージのほかに、乳児と幼児に関するイメージの変化も同時に調査したが、本論では「保育者イメージ」のSCTでの変化を中心に論じたい。

2. 方法

1. 調査対象者

2013年度に、本学幼児教育学科に入学した女子短期大学生を対象とした。

<第1回調査>

2013年度前期『発達心理学』を受講していた女子短期大学生 268名

<第2回調査>

2014年度後期『教育心理学』を受講していた女子短期大学生 246名

2. 調査時期

<第1回調査>

2013年度前期『発達心理学』の初回授業時間

<第2回調査>

2014年度後期『教育心理学』の初回授業時間

3. 調査内容

まず「保育者」に関するマインドマップを作成してもらい、その後「保育者」で始まる文章を最低10以上書くよう教示する、文章構成法(SCT)を用いて調査を実施した。

4. 倫理的配慮

なお調査対象者には、インフォームド・コンセントを行い、本研究への協力に同意したものを調査対象者とした。回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことによる不利益は生じないこと、回答者個人を特定しないものであること、教育・研究の目的以外には使用しないことを口頭で説明し了承を得た。

3. 結果

「保育者」から始まるSCTについて、すべての文章を入力し(全データ数は、1回生2946個、2回生2424個)、テキストマイニングを実施した。分析にはフリーソフトウェア「KHCoder」を用いた²⁾。まずChaSen(茶筌)を用いて形態素分析を行ない、抽出語を出現頻度順に並べ替えた。

Table1とTable2は入学直後と、1年半後の2回生後期に実施した調査の、形態素分析を行い抽出された語で、出現頻度30回以上のものを、出現頻度順に並べたものである。またFig.1とFig.2は、その出現頻度30回以上の語を用いて「共起ネットワーク」図(抽出語を用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだ図)を作成したものである。

まず、形態素分析を行なって抽出した、言葉の出現頻度について、2度の調査結果を比較しながら見てみたい。「保育者」「子ども」「笑顔」「必要」といった言葉は、ともに上位に出現しているが、「大切」については、入学時12位だったものが2回生時には3位に上昇。逆に「上手」については入学時7位だったが、2回生時には32位に下降していることが分かる。また30回以上の出現頻度で見た場合、「エプロン」「歌」という言葉は入学時のみ出現しており、逆に2回生時のみに出現した言葉として(出現頻度の多い順に)前述の「大切」を筆頭に、「気持ち」「援助」「見守る」「連携」「理解」「遊び」「行動」「遊ぶ」「同士」「見本」の11語が見られた。

次に共起ネットワーク図を見てみたい。ここもかなりの変化があったのが見て取れるが、まず最も印象的なのは、「保育者」と「保護者」の距離には2つの図で大きな差がないにもかかわらず、2回生時の図では「子ども」と「保育者」が重なるように図示されているところであ

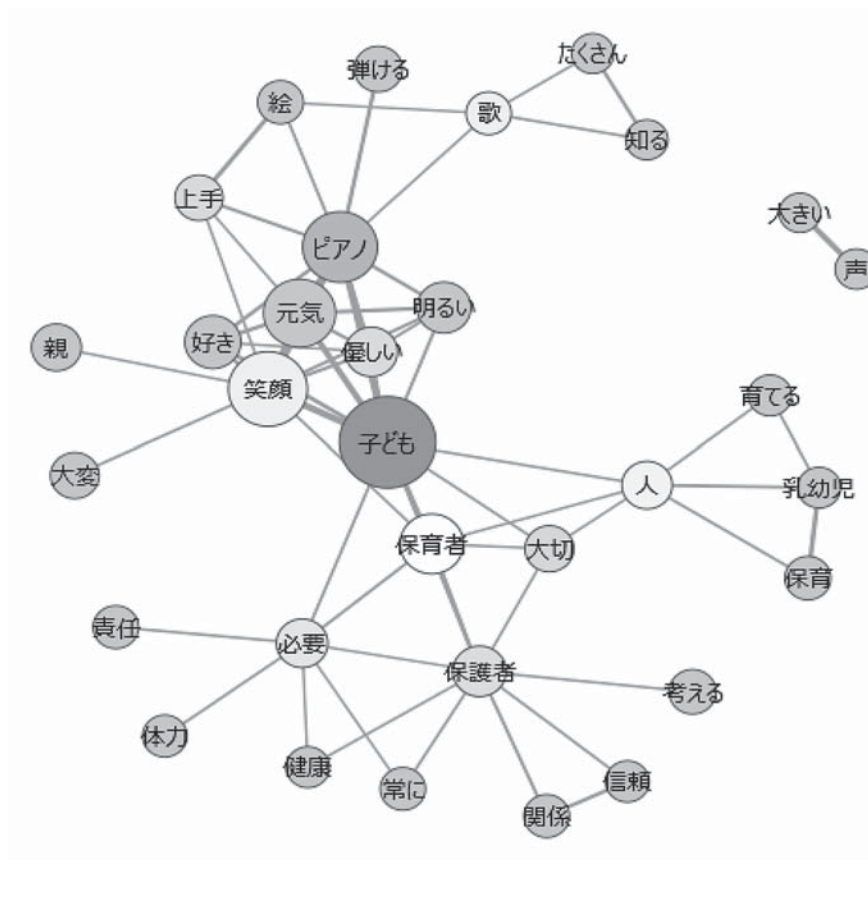


Table1

抽出語	出現回数
子ども	759
保育者	567
笑顔	177
ピアノ	159
元気	150
必要	102
上手	92
好き	89
人	88
保護者	87
保育	83
大切	79
明るい	76
優しい	71
常に	66
大変	60
考える	58
仕事	57
弾ける	55
育てる	50
関係	50
親	50
歌	45
絵	45
多い	45
成長	44
責任	44
信頼	42
体力	41
たくさん	40
エブロン	40
健康	39
知る	37
見る	36
声	34
思う	33
乳幼児	33
忙しい	32
大好き	31
大きい	30

Fig.1 1 回生（入学直後）

う。さらに「保育者」「子ども」「保護者」の3者の関係も、より太い線でつながられ、距離も接近しているのが見て取れる。また、それに深い関係を持つものとして「大切」「必要」などの言葉が位置づけられている。「ピアノ」に関しては、入学直後は「弾ける」「上手」などと結び付けられているのに対し、1年半後は「大切」と結びついているのも特徴の一つである。また「遊び」を知っているという表現は、1年半後のみに見られるものである。

逆に、通常「保育者」が備えていると思われるイメージ、「笑顔」「優しい」「明るい」「元

気」「ピアノ」が「好き」、「声」が「大きい」などはどちらの図でも、ほぼ同じ距離で位置づけられているのも分かる。

それでは次に、具体的な文章について見てみよう。入学直後の典型的な例として「子どもの最善の利益を考える」「保育者は、子どもの自立心、社会性を育てる」「第二次世界大戦後長く「保母」と呼ばれていました」「看護師、保健師のように乳幼児の健康、福祉に関わる人」「保育者になるには、都道府県の実施する保育士資格試験に合格することが必要である」といった、自分自身の考えではなく、テキストなどに記述して

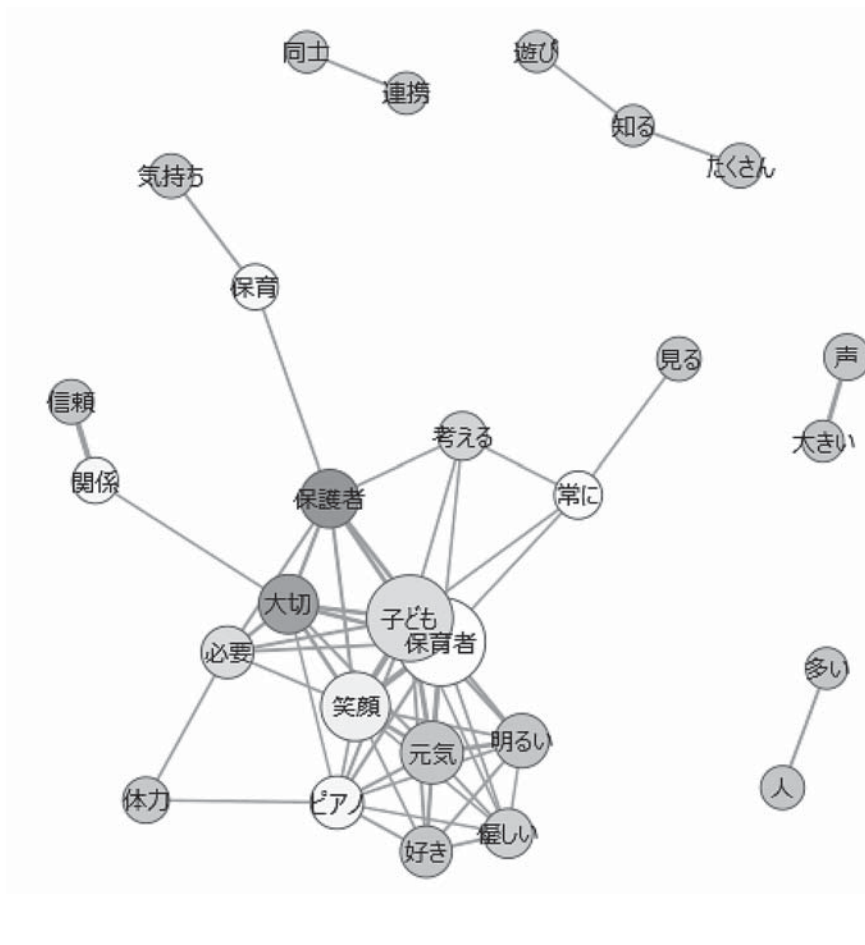


Table2

抽出語	出現回数
保育者	2410
子ども	811
大切	165
笑顔	138
必要	123
元気	114
保護者	108
明るい	80
ピアノ	76
人	75
好き	73
仕事	67
考える	66
常に	63
保育	62
優しい	62
成長	58
関係	56
声	53
たくさん	50
気持ち	50
信頼	49
体力	48
持つ	46
見る	44
責任	43
大変	43
健康	42
援助	40
見守る	38
多い	38
上手	37
連携	36
理解	35
遊び	34
行動	33
遊ぶ	33
関わる	32
大きい	32
知る	32
同士	32
見本	30
大好き	30

Fig.2 2回生 (1年半後)

ある文章そのものを書いているものも数名いた。また「ピアノが上手」「絵が上手」「歌が上手」「エプロンをしている」「ジャージを着ている」など外から見たイメージを書いているものも多かった。

一方2回生時になると「保育者は、保護者を援助する役割がある」「保育者は、職員同士の連携を取り、子どもの状態や変化を常に共有しておく」「保育者は、援助と見守りを使い分け、子どもが自立して行ける様、行動する」「保育者は子どもの発達やその場に応じた援助を行う」「保

育者同士の情報交換は大切」など、現場で働く際に必要な、より具体的な記述も見られるようになる。

逆に、通常「保育者」が備えていると考えられている特徴としての「保育者はいつも笑顔である」「保育者は子どもが好き」「保育者は子どもの気持ちに寄り添う」「保育者は、いつも明るく元気」「保育者は優しい」などはいずれの群にも見られた。

3. 考察

それでは2回の調査結果を比較しながら、特徴的な変化とその理由について、キーワードとともに順次考察する。

まず、いずれの群にも上位に出現した「保育者」「保護者」「子ども」の3者関係について見てみたい。ここで印象的なのは、入学直後は「保育者」を中心に「保護者」と「子ども」がやや離れて位置づけられていたのに対し、1年半後には「保育者」と「子ども」が寄り添うように、重なり合って位置づけられているところであろう。また位置づけられている方向も、入学直後は「保護者」「子ども」は逆の方向に位置付けられているが、1年半後には「保育者」「子ども」「保護者」の順で、同じ方向に位置付けられているのが分かる。また全体的な距離も近くなり、繋がれている線も太くなっていることから、両者の関係も強くなっていることがうかがえる。

この結果は、まさに、彼女らが様々な授業を経験することにより、実感として感じるようになった「保育者」の在り方を示していると言えるのではないだろうか。「保育者」とは、いつも「子ども」に寄り添い、「子ども」の視点に立って、ともにあるべき存在であること。「子ども」にとっては、愛着対象にもなりうる大変重要な存在であること。しかし同時に、その背後には「保護者」が存在し、「保護者」との関係が、何よりも重要であること。保育は「保護者」との「連携」がうまくいってこそ、また「保護者」との「信頼」関係があってこそ、効果を発揮することに、彼女らが気づき始めている様子が表現されているように思われる。

また「保育者」と「ピアノ」の関係について、入学直後は「保育者」とは「ピアノ」が「上手」に「弾ける」人という位置づけだったのに対し、1年半後には、それはまさに自分自身のこととし

て考えた時、必要不可欠なものとして身に付けなければならない「大切」な能力へと変化していることも分かる。これは「ピアノ」に限らず、「絵」や「歌」についても同様で、客観的に見て「上手」な人ではなく、まさに自分が身に付けなければならないものへと変化していることの表れであるように思われる。

また入学直後は、「エプロン」や「ジャージ」を着用しているという表現に代表される様に、自分が幼かった頃、実際にお世話をしてもらった人としての「保育者」や、中学生の時の職場体験で憧れた「保育者」、さらには、テレビ番組等で目にする「保育者」イメージ、換言すれば、外から「保育者」を見て想像されるイメージに関する記述が多くみられる。それに対して、1年半後には、自分が実際になる（目指す）ものとしての「保育者」イメージへと変わる。

つまり入学直後は、「保育者」は外から見ている人にすぎず、自分自身の立ち位置も外であった。しかし1年半が過ぎ、保育士養成のための様々な関連授業を受け、3種類の実習も終えた。あと半年後には、自分自身が実際に「保育者」として、現場で働いているかもしれないということまでたどり着いた。間もなく就職活動も本格化する。その時「保育者」は、自分自身が近い将来なる（目指す）ものであり、そのイメージも、自分自身と重ねて考えるものに変化した。そのため、自分自身の立ち位置も、外ではなく内へと変化したのではないだろうか。

内側から、自分自身と重ねる形で「保育者」をイメージするとき、かつての見え方とは異なる視点が生まれる。その表れが「大切」「気持ち」「援助」「見守る」「連携」「理解」「遊び」「行動」「遊ぶ」「同士」「見本」という、後半の調査でのみ出現した言葉にも反映されているように思われる。

保育の仕事は決してひとりではできない。先輩保育士や、同僚、さらには「保護者」との連携や協力が不可欠であり、その部分に大きく関わるのが「信頼」関係である。園児はもちろんのこと、「保護者」の支えとなるべく、ある時は見守り、ある時は「援助」の手を差し伸べる。

そしてどんな時でも、相手の「気持ち」に寄り添い、「理解」したいと思う気持ちを忘れないこと、相手の視点で物事を見る力を身に着けることが大切である。

また「保育者」はたくさんの「遊び」を知っている必要がある。乳幼児期は、「遊び」が生活そのものであるといっても過言でない時期で、園児が「遊び」から学ぶことは多い。園児に効果的な言葉がけや働きかけができるためには、「遊び」の意味や奥深さについて、多くの学びも必要となるし、自らが遊び込んだ経験があることも大切になる。「遊び」の楽しさを、自らも心から味わったことがあるからこそ、園児にその楽しさを伝えることができるという。口先だけの、見かけ倒しの援助では、本当の楽しさは伝わらない。

また、「保育者」の「行動」や在り方は、様々なところで園児の「見本」となる。園児は「保育者」の「行動」を実によく見ている。そのため日頃から、園児と関わる時以外でも、自らの「行動」に責任を持つ必要がある。

しかし一方で、時間が経っても変わらない側面もあった。「保育者」が本来備えておくべき資質としての部分、「笑顔」や「明るさ」「優しさ」「元気」であることなどは、1年半が過ぎて、実習等を経験しても変わることはなかった。これらはより確かなものとして、確信を持ったイメージとなったに違いない。

2年間という短い期間の中で、保育者となるために、多くのことを学び、3種類の実習を経験し、あっという間に卒業の時を迎える。入学直後と異なり、「保育者」の仕事が持つ大変な部分や、マイナスの側面が見えかけている場合もある。

しかしそれ以上に、この仕事にやりがいを感じ、子どもとのかかわりが本当に好きな学生も多く存在する。20歳という年齢は若く、未熟なところも多々あるが、これからの「伸びしろ」も大きいことに期待したい。

現場でも適応できる「保育者」を目指して、反省的实践家として、自分自身を磨き続けてほしいと願う。

引用文献

- 1) 鳥丸佐知子 保育士ってどんな人？ 日本発達心理学会 第21回大会発表論文集 (2010)
- 2) 樋口耕一 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版 (2014)